

ガネフォの思い出

ガネフォ水球

桑原和司(82歳)

(成城大学出身)

1963年11月2日羽田発マニラ経由で Djakarta に行った。

インドネシアの標準時は、東経120度で日本より1時間遅い。ジャカルタ空港税関を出てロビーに行くと、愛国青年らしき一人の男が「Hidup GANFO、Hidup Japan!」と叫んでいる。“ヒドゥップ”とは万歳の意味らしい。

ムツとする熱いロビーに入ると、夜10時だというのに蒸し暑さを感じた。南緯10度のジャカルタを実感した。送迎バスに乗り、選手村に向った。入口には入場者や選手を検問するゲートがあり、治安の悪い国にしては選手、関係者の安全が保たれていると安心した。選手村に入ると12名の水球選手は二グループに分けられ6人ずつ部屋に入った。マラリヤが常に流行している国なので寝室のベッドには蚊を寄せ付けない白い蚊帳が各自のベッドに張られていた。夜は思いの他涼しく、冷房不要で安眠できたのは驚きであった。

マナップという少年が、部屋の掃除と洗濯をしてくれた。用事のある時、名前を呼ぶと部屋の入口で「オープ」と返事をして入ってくる。いつも裸足であった。それが彼地の礼儀のようであった。

朝3時頃からイスラム教徒のコーラン(祈り)の音が聞かれ、怠け者が多いインドネシアのイメージを少し改めた。我々の日常の服装は白くて短い半パンツ、上半身は各自思い思いの半袖アロハシャツであった。履物はゴムサンダルで、正式の場には日の丸の付いた紺のブレザーコート、赤いネクタイ、グレイのズボン、黒靴であった。正装で街を歩くと、よくサインを求められ、誇らしかった。

選手村には3つの食堂があり、①インドネシア料理、②支那料理(チャイニーズ)③西洋料理が固定制であった。キムチと白飯を食べたい我々は、いつもチャイニーズを食べたが、時には門番を抱き込んでインドネシア料理、西洋料理も楽しんだ。キャプテン菅久は変化を我々に楽しませてくれた。

選手村にはインドネシアの高校生、大学生が物珍しそうに我々の部屋を訪ねて来る。可愛い女の子たちが未熟な英会話力で話しかけて来るので Queen's English を教えてやったものである。それが出来たのは、自分と房野だけとっていたら、浜野がテリブル(ひどい)イングリッシュを駆使し、可愛いチャン・リーという中国系インドネシア女子と親密になったのには驚かされた。

このインドネシア遠征で、その後の自分の方向を決める大きなキッカケを得た。

それは、英語の有用性であった。英会話に堪能になれば世界の諸国人と意思疎通ができる。これはマスターの要ありというものであった。

そこで、独学で英会話の勉強をし、2年後、勤務先銀行が英会話の出来る若手行員を育てるから、希望者は行内選抜をパスすれば、毎年4名を四谷の日米会話学院に6か月間、銀行業務から離れて派遣すると発表したのので、真っ先に希望し、行内受験を受けた。偶々、20人の受験生の中で最も若い年齢で且トップの成績を挙げたら派遣された。

幸いにもそこでも上級クラスで会話力有りと評価され卒業後、ニューヨークの大銀行ケミカルバンクで半年勉強したら評価され、のち、N.Y.の証券会社メリルリンチ、サロモンブラザーズへ半年派遣され、帰国後は国際部に配属され、米英の大証券会社との縁が出来、その後の方向が定まり、66歳での銀行退職までそれが続いた。英語と米英サマサマで、現在の年金生活まで GOOD LUCK が続いている。そのきっかけが、1963年のジャカルタ行きであった事を考えると今八十路に入った自分にとり、ガネフォ参加は重要なエポックメイキングな出来事で、3人の子供達はその恩恵に浴していると言えよう。

おおきに ガネフォ！（京都弁で有難う）



スカルノ大統領と語る 桑原和司（私）